

ソブリンAI開発競争：日・米・中・欧の戦略比較

「ソブリンAI（AI主権）」とは、自国のインフラ、データ、人材でAIを開発・運用し、技術的自立を目指す国家戦略です。米中の巨大IT企業への技術依存リスクが高まる中、世界各国がAI開発の主導権を巡り、独自の戦略を推進しています。



日本：官民連携による国産エコシステム形成

スーパーコンピュータ「富岳」等を活用し、オープンソース戦略で効率的な開発を目指す。

日本の主な国産モデル



Fugaku-LLM



NEC
「cotomi」



NTT
「tsuzumi」

課題

資金と人材不足：米中に比べ投資額が小さく、高度なAI人材の確保が急務となっている。



米国：民間主導による圧倒的なAI覇権

巨大IT企業が開発をリードし、政府は安全性確保など環境整備に注力する。

2023年の民間AI投資額：
\$ 1,090億ドル

世界全体の約81%を占め、他地域を桁違いにリードしている。

世界最高性能モデルを多数輩出



OpenAI
(GPT-4)



Anthropic
(Claude)



Google
(Gemini)



中国：国家主導によるAI自給自足

政府が産業を統制的に育成し、2030年までにAI分野で世界トップを目指す。

190種類以上の国産モデルが乱立



Baidu
「ERNIE」



Alibaba
「Qwen」



国内ユーザー
は8億人超

課題

米国の半導体輸出規制：独自のAIチップ開発やオープンソース活用で制裁下での発展を模索している。



欧州：「デジタル主権」と規制によるアプローチ

倫理や人権を重視した「AI法」でルール形成を主導し、欧州の価値観を反映させる。

オープンな共同研究に強み

- 仏Mistral AIの高性能モデル
- 多国籍プロジェクト「BLOOM」

課題

技術と投資で米中に後れ：計算資源が不足しており、EU主導でインフラ強化を進めている段階。